

## 吉藏撰『仁王經疏』における問題

栗谷良道

吉藏撰『仁王經疏』の研究については佐藤哲英博士の著書『天台大師の研究』の中で天台との関連から言及されているが、著書中、吉藏撰『仁王經疏』には智顗からの思想的影響のあることが指摘されている。実際、疏中二度に亘つて天台智者の名前を見いだすことができる。しかし、この二点について吉藏は疏中「天台智者於衆經中闡明五義。」（大正三三・三一四中）、あるいは「天台智者言。」（同前・三三〇下）と述べているだけであり、天台のいずれの著書からの引用であるかはあきらかでない。

然るに佐藤博士は著書中他の箇所において五門分別は天台説『法華玄義』からの引用であると指摘されており、その傍証として「若具明教相。諸經不同。備如法華玄義釈。」（大正三三・三一五中）という一文をあげ、疏中の法華玄義が天台説『法華玄義』を指すものと解されている。果してそうであろうか。

この箇所は、まず江東諸師の三種分教を述べ、続いて吉藏は疏中「今依菩提流支直作半滿分教。」（大正三三・三一五中）と述べて半滿義の典拠を菩提流支に求めている。それに対し天台説『法華玄義』では三種の教相を述べているものの、続いて「次難流支半滿義。」（同前・八〇四上）と述べており、菩提流支の半滿義に対しては批難しているのである。

ところで吉藏の他の著書『法華玄論』巻第三にも三種教相の記述があり、さらに菩提流支の半滿義にふれ「即知半滿有本」（大正三四・三八四下）と述べて菩提流支に典拠を求めている。ここに『仁王經疏』と『法華玄論』とに一致点がみられる。

そこで疏中用いられている「法華玄義」という言葉の使い方であるが、吉藏撰『中觀論疏』にも「法華玄義」の語が二度用いられている。すなわち巻第一本と巻第八末の二ヶ所であり、前者は『法華義疏』巻第一、後者は『法華玄論』巻第五に相当箇所を見いだすことができる。さらに『法華義疏』巻第三、『中觀論疏』巻第一末には「玄義」という語がみられるが、これら両者は共に『法華玄論』中に相当箇所をみいだすことができる。

このように吉藏は自らの著書を指して「法華玄義」あるいは「玄義」と呼んでいる類例を見いだすことができるのであり、本疏中の「法華玄義」もその域を出るものではない。それ故、吉藏が天台説『法華玄義』を見たという確証はなくなり、五門分別の引用がいずれの著書からの引用であるかは不明である。

また天台からの影響として「因縁生法即空即假即中」（大正三三・三一八上）という一文が指摘されている。この言葉は疏中「若依正觀」とあるように『中論』からの引用であり、吉藏は他の著書においてもかなりの回数で引用している。この問題について平井俊栄先生は、天台と吉藏とに解釈上の相違のあることを指摘されている。さらに言及するならば『二諦義』巻上には「如中論云。因縁所生法。我說即是空。亦為是假名。亦是中道義。從來明。此是三是義。一因縁即是空。二是假。三是中。此之二諦。」（大正四五・八二下）と述べられている。すなわち、この偈は從來、三是義として問題に

されていたのであり、従来の三是義に対して「此之二諦」と述べて吉蔵自らの見解を述べている。吉蔵はまた『三諦義』巻上において、開善が「用中道為三諦体」（同前・一〇八上）と述べたことに對し、自らの立場である中道為体説との相違を述べ、最終的には「仁王經明三諦義。彼便曲解。」（同前・一〇八下）と述べて開善の説を斥けている。また同書には「從來明有三諦義。一世諦二真諦三非真非俗諦。」（同前・九一中）とあり、從來すでに三諦義が問題とされていたことを紹介し、次に「雖有三諦。不乖常依二諦說法。何者。今真俗是二諦。撰真俗二為世諦。不真俗為第一義。」（同前・九一中）と述べている。すなわち吉蔵にとつて三諦とは二諦の重層的構造を示すものであり、第三諦とされる「非真非俗諦」たりとも、世諦に對する第一義諦にほかならず、決して二諦の域を出ることはない。

さらに天台からの影響として、同居報上、実報無障礙報土、常寂光土（大正三三・三三五上）中）が指摘されている。これらの言葉は『仁王經』中の「三賢十聖住果報。唯仏一人居淨土。」という一文を解釈した語であるが、この『仁王經』の一文は吉蔵の淨土觀の典拠として処々に用いる文句であり、吉蔵にとつて非常に重要な語である。この一文を解釈した同居報土、実報無障礙報土、常寂光土という語は、実際、天台が処々に用いているが、また吉蔵にも類例を見いだすことができる。すなわち『法華義疏』『勝鬘宝窟』『法華統略』にも常寂光土を見いだすことができる。ここで特徴としては吉蔵がこの常寂光土を述べる場合、きまつて『普賢觀經』を典拠にあげており、その源はあきらかである。

次に実報についてであるが、吉蔵撰『涅槃經遊意』には「地經説  
吉蔵撰『仁王經疏』における問題（粟谷）

仏相好為実報身也。」（大正三八・二三六上）とあり、実報の典拠を地經に求めている。この一文はすでに指摘されているように、『大乘義章』にも見いだすことができる。また『大乘義章』卷第十九淨土義には「実報之身。依実報土。」（大正四四・八三六下）とあり、すでに実報土について言及されている。もし吉蔵が『大乘義章』を見ているとすれば、『大乘義章』の影響ということも考えられる。

最後に同居土についてであるが、『維摩經義疏』『大乘玄論』にも見いだすことができる。すなわち「就淨土中。更開四位。」（大正三八・九二七中、同四五・六七上）とあり、四種の淨土が説かれており、その典拠として、『仁王經』の「三賢十聖住果報。唯仏一人居淨土。」という一文が引用されている。吉蔵の説く四種淨土とは凡聖同居土、大小同住土、独菩薩所住土、諸仏独居土の四種であるが、典拠としての『仁王經』の一文より考えるならば、諸仏独居土が「唯仏一人居淨土。」という一句によることはあきらかである。そこで同居土であるが、これは諸仏独居土の独居土に對して同居土と述べたものと考えられる。同居土が独居土に對するものであるならば、あきらかに『仁王經』の影響ということになる。

以上、結論を述べると、まず『仁王經疏』中の「法華玄義」とは『法華玄論』を指すのであり、天台説「法華玄義」を見たという確証はなくなり、五門分別の引用がいずれの著書からの引用であるかは不明である。そして天台からの影響であると言われている「因縁生法即空即仮即中」「同居報土」「実報無障礙報土」「常寂光土」については、吉蔵が根拠を示して用いているのであり、吉蔵の根拠をみてくるかぎり、天台からの影響とは言い難い。（註略）

（駒沢大学大学院）